普及と映像資料収集の両立
～「きしわだネイチャー探訪」の取り組み～

きしわだ自然資料館　主任（学芸員）　風 間 美 穂

1．はじめに

地域の自然を記録した映像は、自然史博物館の重要な収蔵資料となり得るものだが、予算や人員の面で制約の多い小規模館では、それを新たに制作・収集し、利用公開の促進を単独で行うことは困難である。本稿では、2012年からきしわだ自然資料館が大阪府岸和田市および泉北郡忠岡町を営業エリアとするケーブルテレビ局「株式会社テレビ岸和田（以下テレビ岸和田）」と共同で続けている映像資料とそれを活用した普及番組「きしわだネイチャー探訪 (以下ネイチャー探訪)」（図１）の制作、およびそれが地域へもたらした効果などについて報告する。

図１　きしわだネイチャー探訪

2．きしわだ自然資料館における映像資料の制作と収集

1）映像資料の制作・収集に至る経緯

きしわだ自然資料館は、開館直後の1995年から、テレビ岸和田が制作する情報番組や市の広報番組を通じて、普及イベントや展示などの紹介を行ってきた。また、テレビ岸和田からの要請に応じて、身近な地域の自然を扱うニュースや情報番組への専門的なアドバイスは行ってきたが、当館が主体となったものではなかった。

はじめて当館が主体的に映像制作に関わったのは、独立行政法人科学技術振興機構（JST）による「平成19年度地域科学技術理解増進活動推進事業科学館開発支援」を受け、2007～2008年にかけて大阪湾をテーマにした事業を実施したときである。このとき制作した映像

図２　普及活動用映像

は、大阪湾に生息する生物、大阪湾の環境、大阪湾で行われている漁業を紹介した計約 30 分の作品で、DVD やビデオテープの形態で学校や図書館、科学館などに配布し、現在も活用され続けている。この事業が、地域自然史を扱う博物館の専門性とケーブルテレビ局の高度な撮影、編集技術が交わるきっかけとなり、その後も身近な自然をテーマにした普及活動用の映像を継続して制作するようになった（図 2）。

この過程で、制作上の制約によりカットされた映像のなかにも資料的価値の高い映像があること、岸和田市周辺という限られた地域で撮影された映像であっても、専門的見地からは興味深いものが少なくないこと、映像の教育・普及的な効果は高く、学校園からの要望も多いことが明らかになった。これを受けて、地域住民向けに身近な自然を紹介する定期的な放送番組を制作し、それに当館が全面的に関わってもらいたいという提案がテレビ岸和田から寄せられ、2012 年 11 月から、両社が共同して市民向けの自然情報番組「きしわだネイチャー探訪」の制作・放送を開始した。現在も月 1 回の頻度で新たな映像の制作と番組の放送は続いている。なお、当館の関わりは人的なものに限られており、撮影や編集にかかる費用は、すべてテレビ岸和田が負担している。

この番組は、テレビ岸和田の加入者約 37,000 世帯に配信され、無料放送チャンネルで毎日 1 回放送されている。制作した番組は 2017 年 1 月現在で 56 作品に上り（表 1）、これまでに撮影された映像の累計は 5000 分近くに及んでいる。

回　数	放　送　月	内　　容
第 1 回	2012 年 11 月①	ため池に飛来するシギやチドリ類
第 2 回	2012 年 11 月②	久米田池と海辺の水鳥
第 3 回	2012 年 12 月	クロツラヘラサギ・神於山の植物
第 4 回	2013 年 1 月①	秋の果実
第 5 回	2013 年 1 月②	冬の和泉葛城山 ブナ林
第 6 回	2013 年 2 月	冬にやってくるカモたち①
第 7 回	2013 年 3 月	冬にやってくるカモたち②
第 8 回	2013 年 4 月	岸和田城・お堀の生き物大調査！
第 9 回	2013 年 5 月	アオサギのコロニー
第 10 回	2013 年 5 月	ケリの繁殖
第 11 回	2013 年 6 月	初夏のブナ林
第 12 回	2013 年 6 月	初夏の和泉葛城山 / カルガモの親子
第 13 回	2013 年 7 月	大津川河口干潟の生物
第 14 回	2013 年 7 月	カイツブリ・バンの繁殖
第 15 回	2013 年 8 月	夏の里山の昆虫
第 16 回	2013 年 9 月	久米田池のツバメのねぐら
第 17 回	2013 年 10 月	オオバンの繁殖 / 岸和田で釣れる魚
第 18 回	2013 年 11 月	秋の和泉葛城山
第 19 回	2013 年 11 月	岸和田市内の天然記念物①
第 20 回	2013 年 12 月	冬の訪れ～和泉葛城山周辺～
第 21 回	2014 年 1 月	冬の海辺で見られる生物
第 22 回	2014 年 2 月	岸和田市内の天然記念物②
第 23 回	2014 年 3 月	大阪湾生き物一斉調査
第 24 回	2014 年 4 月	春木川①
第 25 回	2014 年 5 月	春の和泉葛城山 2014
第 26 回	2014 年 6 月	和泉葛城山の植物 2014
第 27 回	2014 年 7 月	スナメリ調査
第 28 回	2014 年 8 月	市街地の生物
第 29 回	2014 年 9 月	大阪湾の生き物たち・潜ってみよう①
第 30 回	2014 年 10 月	大阪湾の生き物たち・潜ってみよう②
第 31 回	2014 年 11 月	久米田池の秋の鳥・スナメリ
第 32 回	2014 年 12 月	久米田池のヘラサギ
第 33 回	2015 年 1 月	春木川②
第 34 回	2015 年 2 月	冬の鳥類の生態
第 35 回	2015 年 3 月	コウノトリの飛来
第 36 回	2015 年 4 月	春木川③
第 37 回	2015 年 5 月	ケリの繁殖とヨシガモ・オオバン
第 38 回	2015 年 6 月	キジ・ハシブトガラスの繁殖・トビ
第 39 回	2015 年 7 月	カタツムリの生態とヘイケボタル
第 40 回	2015 年 8 月	春木川④
第 41 回	2015 年 9 月	海浜植物とウミホタル
第 42 回	2015 年 10 月	大阪湾・イワシ巾着網漁
第 43 回	2015 年 11 月	久米田池と農業
第 44 回	2015 年 12 月	春の七草・ミコアイサ
第 45 回	2016 年 1 月	泉州の地質
第 46 回	2016 年 2 月	岸和田市内の天然記念物③
第 47 回	2016 年 3 月	スズメとコゲラの繁殖
第 48 回	2016 年 4 月	津田川①
第 49 回	2016 年 5 月	津田川②
第 50 回	2016 年 6 月	津田川③
第 51 回	2016 年 7 月	大阪湾の生き物・潜ってみよう③
第 52 回	2016 年 8 月	大阪湾の生き物・潜ってみよう④
第 53 回	2016 年 9 月	大潮の夜・アカテガニ
第 54 回	2016 年 10 月	チョウゲンボウ 2016
第 55 回	2016 年 11 月	津田川④
第 56 回	2016 年 12 月	久米田池の養魚と生物
第 57 回	2017 年 1 月	岸和田市内の地質と地形

表 1　これまでに制作した番組

2）制作と放映の流れ～テーマの決定から撮影・編集・放映まで

「きしわだネイチャー探訪」の年間テーマは年度当初に決めているが、突発的な事情や視聴者からの要望を受けて変更されることも多い。また、地域住民から寄せられた自然情報はなるべく取り上げるようにし、後々の新たな情報提供にもつなげている。

撮影は月１回、放映月のはじめに行っており、テーマによっては早朝や夜間に行うこともある。撮影には当館の学芸員や関わりのある専門家が同行し、撮影内容や場所を調整している（図３）。水中撮影の際には、潜水士の資格を持つ学芸員が撮影スタッフとともに潜水している。

図３　ネイチャー探訪撮影のようす

撮影後はテレビ岸和田が編集した映像に、撮影に同行した学芸員や専門家がナレーションをつけ、下旬から放送を開始するというのが一般的なスケジュールである。

この過程で生み出された映像資料のうち編集後の番組は、メディアに焼き込んだ形で当館とテレビ岸和田がそれぞれ保管している。また、テレビ岸和田のサーバには編集過程で使用されなかった膨大な映像も保存されており、後々の映像制作の際に利用しているほか、要望があれば他の研究機関や学校教育施設、社会教育施設などに無償で提供している。

3）映像資料制作上の留意点

撮影は、番組で伝えたいことを明確にし、それを制作関係者で共有したうえで進めている。国の天然記念物に指定され、地域住民も頻繁に訪れている「和泉葛城山ブナ林」を紹介する番組の撮影では、単に希少生物や美しい風景を紹介するだけではなく、生物多様性保全上の価値の理解に少しでもつながるような映像を選び、学芸員や専門家によるナレーションでもそれを意識的に盛り込むことで、このブナ林が貴重とされる理由を地域住民が容易に理解できるような構成となるよう心がけている（図４）。また、岸和田市周辺の地質を紹介する番組では、地味でむずかしいと思われがちなこのテーマに少しでも興味を持ってもらえるよう、「だんじり祭り」や岸和田城など、地域住民に親しまれている文化的資源に関連した場所を選び、地域の地質に精通した専門家がそれを意識したナレーションを行うようにしている。

図４　和泉葛城山ブナ林撮影のようす

3.「きしわだネイチャー探訪」による地域との関係性の変化

1）地域住民による自然情報提供の増加および多様化

本番組の放送以降、視聴した幅広い年齢層の地域住民から、地域の自然に関する情報提供を受ける機会が増えるようになった。以前より市民からの自然情報の提供はあったが、提供者の多くは友の会会員など、もともと自然への関心が高い利用者が中心であった。しかし番組放映後には、これまで来館したことのない方やあまり出歩かなくなった高齢者など、それまで当館との関わりがうすかった地域住民の方からの情報提供も増えたように感じている。自宅の庭で見られる生物のことなどちょっとした情報だが、簡単には入れないような場所での記録が含まれるなど、地域自然史情報を蓄積する上での意義は大きい。さらに、地元の漁港内にスナメリが入ってきたことや（図 5）市街地にあるビルでの猛禽類が繁殖したことなど、学術的に有用な情報が提供される場合もあり、館の調査・研究活動への貢献も小さくない。

図５　市民から情報提供を受けたスナメリの記録

2）「博物館」が希望する資料内容の周知

番組では、単にめずらしい生物や自然現象を紹介するだけに留まらず、普通種情報も貴重なのだということを感じ取れるような内容を意図的に盛り込むようにしている。また、ナレーションには撮影日時や場所、撮影状況などをできるだけ入れるようにしており、博物館が収集している標本や記録にはこれらの情報が欠かせないことの周知効果をもたらしていると思われる。実際、メジロが自宅の庭で繁殖したという情報が寄せられた際は、身近な鳥の情報を教えて欲しいという番組中のコメントを聞いたことが情報提供のきっかけになったとのことである。当館ではこれまでにも、資料や標本の収集方針について、展示や印刷物などでふれてきたが、地元ケーブルテレビ局の番組によって、地域への周知の幅を広げることができたのかもしれない。

3）きしわだ自然資料館の存在の周知・より、顔が見える博物館へ

開館から 20 年以上を経過した当館だが、その存在は地域住民に十分知れわたっているとはいいがたい。また「資料館」という名称から、資料を保管しているだけの施設と思われている場合もある。しかし、きしわだネイチャー探訪の放映は、両者の距離を短くすることにつながったように思われる。また、放映地域での調査や、野外での普及活動、来館者への質問対応などで学芸員などが対応する際、番組の視聴者から声をかけられ、番組に関する感想のほか、身近な地域の自然情報などを直接提供されることが多い。これは、ケーブルテレ

ビという、多くの地域住民にアプローチできる媒体を通して、当館の学芸員の顔がより見えるようになったことで、館そのものに親しみをもたれるようになったと考えられる。

4）理科教員以外（社会科・生活科など）との交流

きしわだネイチャー探訪のなかで、地域の河川や社寺林紹介、農林水産業を紹介する内容の番組が最近、小学２年生の生活科「まちたんけん」や、小学校４年生の社会科郷土学習などで利用され、利用する教員との、番組内容に関する要望を含む交流がうまれつつある。以前から、理科担当以外の教員との交流は行われていたが、この番組が、地域のより多くの教員との交流につながると考えられる。

4. これからの課題

この取り組みによる映像資料の作成は、地域住民への普及が出発点であったため、これまでに収集した映像の体系的な収蔵や登録、広く公開する仕組みづくりなど、博物館資料としての活用については未着手の状態であるが、これらの映像資料をより広く公開し、研究者などによる活用を促進することは、地域の自然史博物館にとって重要な使命であると考える。しかし、このプロセスのなかで想定される、著作権、検索システムのあり方、公開方法など、当館だけでは解決が難しい課題は多い。今後は、これらをより活用するために、映像資料を多数所蔵する、他の施設との連携が必要になると考える。

5. おわりに

総務省の調査によると 2016 年現在、自主放送を行っているケーブルテレビ局は全国で 671 局、それにケーブルテレビ局以外の放送媒体を含めると、地域の情報を映像発信する機関はさらに増える。展示や普及活動の広報でこれらを利用している博物館は、当館のような取り組みを実現できる可能性は十分あると考えられる。

放送媒体を通した普及活動の継続は、博物館活動を地域社会に展開していくうえで重要である。地域住民のなかで、自分の住む場所の自然に興味をもち、それらを保全したい、あるいは調べたいなどと思う人材を育てるという、自然史博物館の重要な使命のひとつを展開するには、より多くの地域住民に伝えることができるこの手段は有効ではないだろうか。

その結果、博物館とそこに関係する調査研究に携わる人材が、地域文化の核となると考える。